

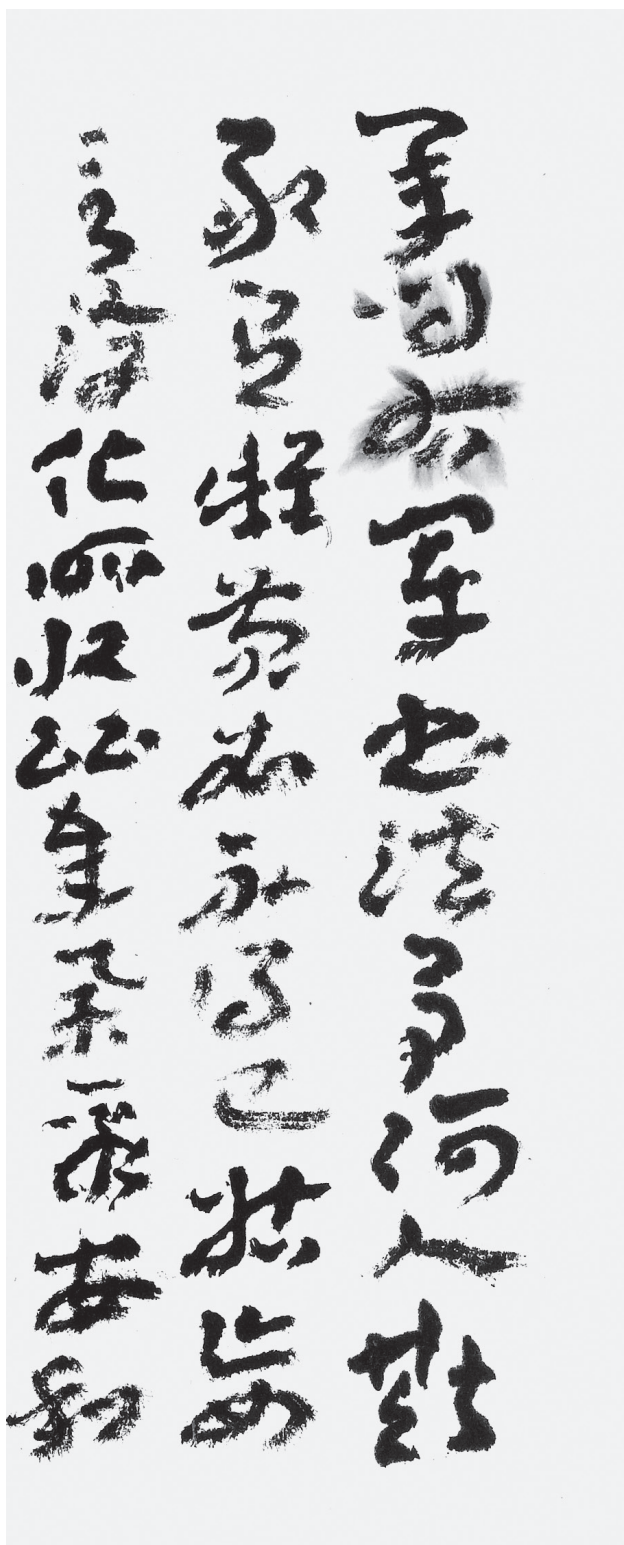
章草の聖人

王蘧常の尺牘

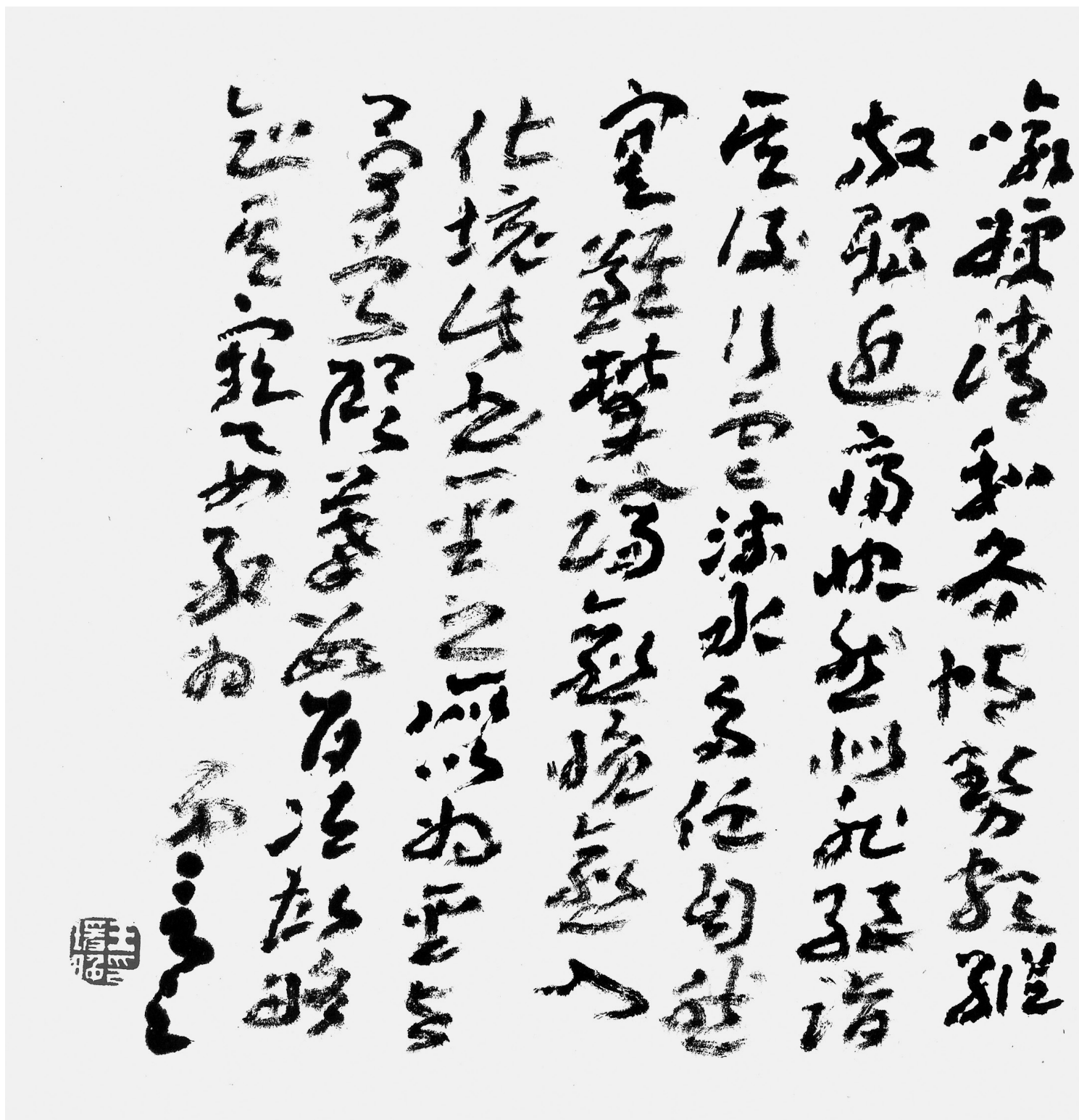
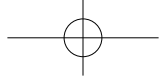
上海にて尺牘集『蘧草法帖』が刊行

「章草」の聖人として知られ、その晩年には、「昔は王羲之あり、今は王蘧常あり」と讃えられた王蘧常（一九〇〇―一九八九）。二〇一七年に「王蘧常研究会」が発会（本誌二四八号参照、その後、今年は、生誕百二十年となる記念の年を迎えた。そして、この度、その「蘧草」（章草を展させた王蘧常独特の書体）による尺牘多数を収録した『蘧草法帖』が上海にて刊行された。王蘧常に師事した郭同慶氏の解説（七六頁）とともに、ここに紹介しよう。

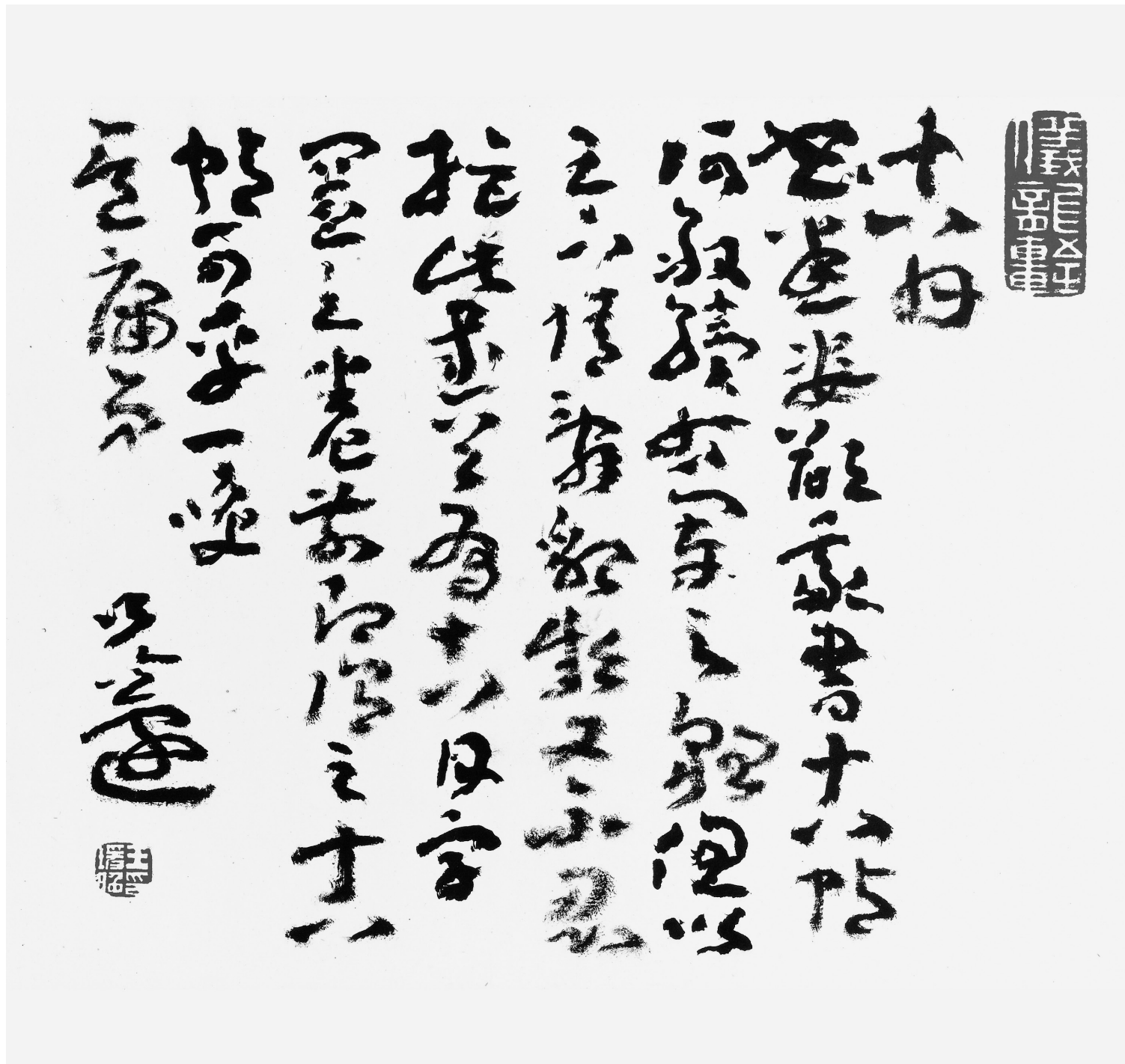
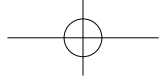
承問帖（馮其庸宛「十八帖」より）



王蘧常（一九〇〇―一九八九）

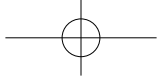


承問右軍書法 予何人斯
敢有雌黃 必不得已 姑妄
言 淳化所收比奉舉聚安和
喻硬清和各帖 勢頗縱
放 殆近痛快 然似非絕詣
其後行雲流水 多任自然
寔難攀躋 愈晚愈入
化境 此書聖之所以為聖與
予曾臨摹數百次 故略
知其竅要 敢為 弟言之



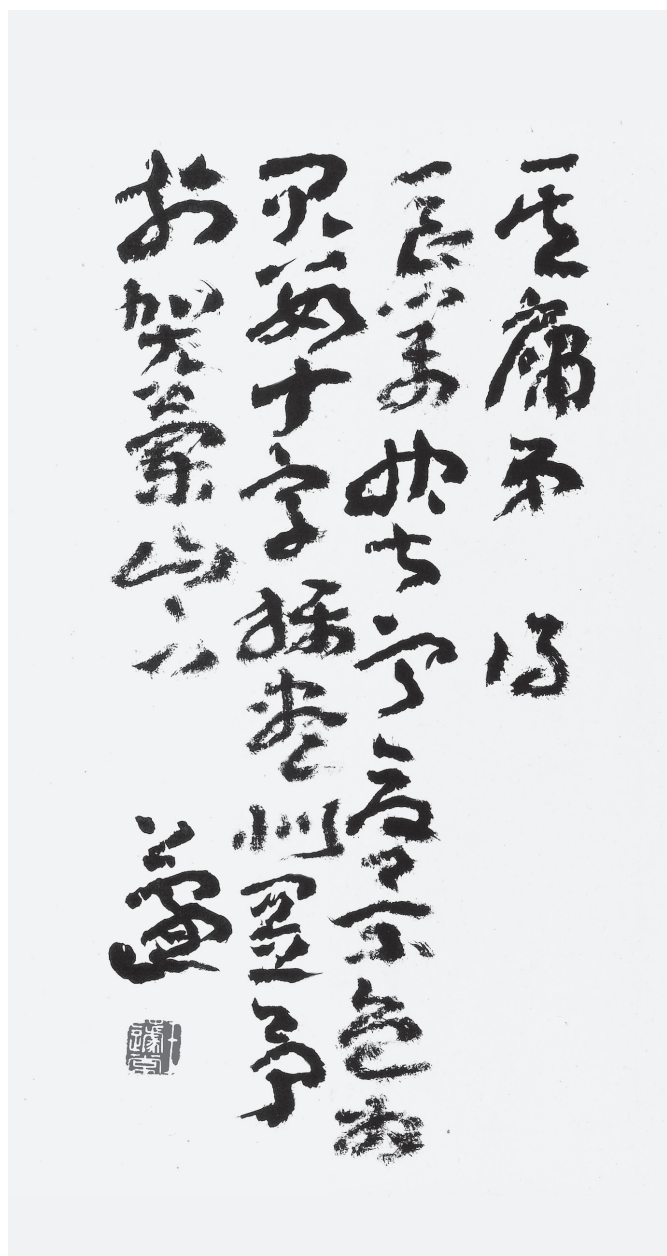
十八帖
(馮其庸宛「十八帖」より)

十八日
書悉 婁欲我書十八帖
何敢續右軍之貂 但以
足下情辭猥款 又不忍
拒 此書首有十八日字
置之卷前 即謂之十八
帖可乎 一笑
其庸弟 兄蓮



章草の聖人
王蘧常の尺牘

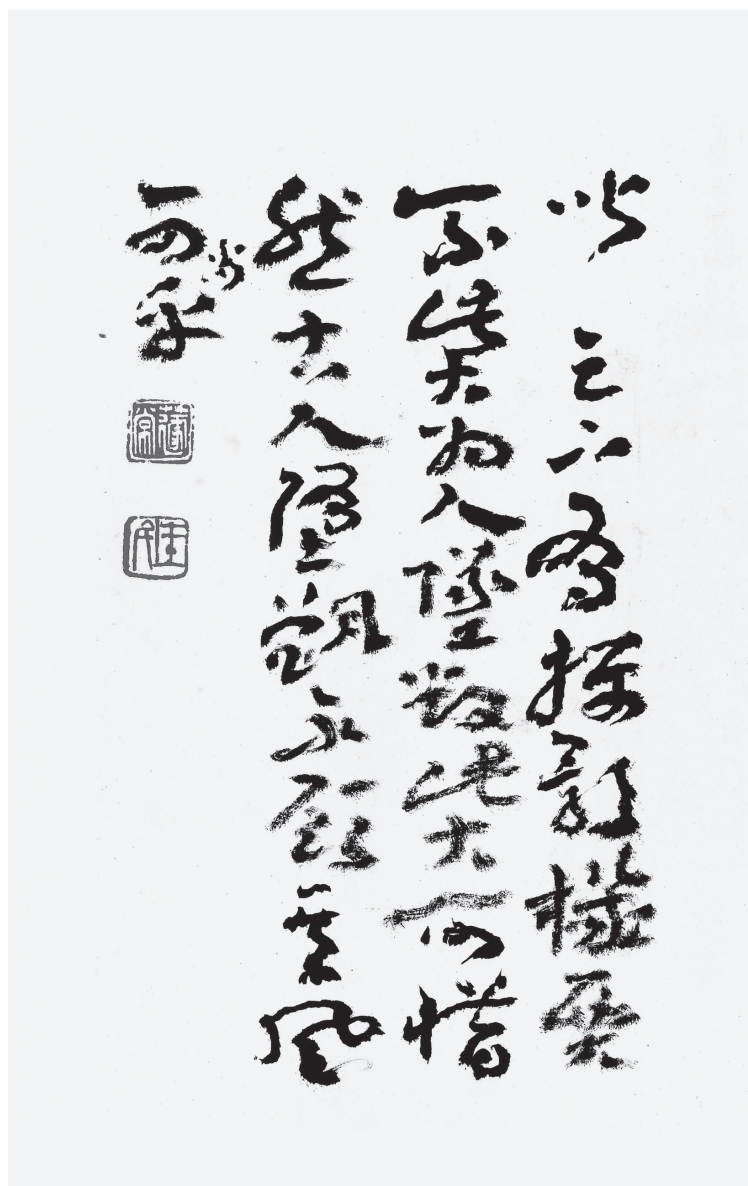
其庸弟 得
長箋 快甚 寧夏景色爲
君數十字攝盡 似置予
於賀蘭山下 蘧



長箋帖
(馮其庸宛「十八帖」より)

聞 足下有攝影機 買
不貲 爲人墜毀 此大可惜
然古人墮甌不顧 其風
可尚乎

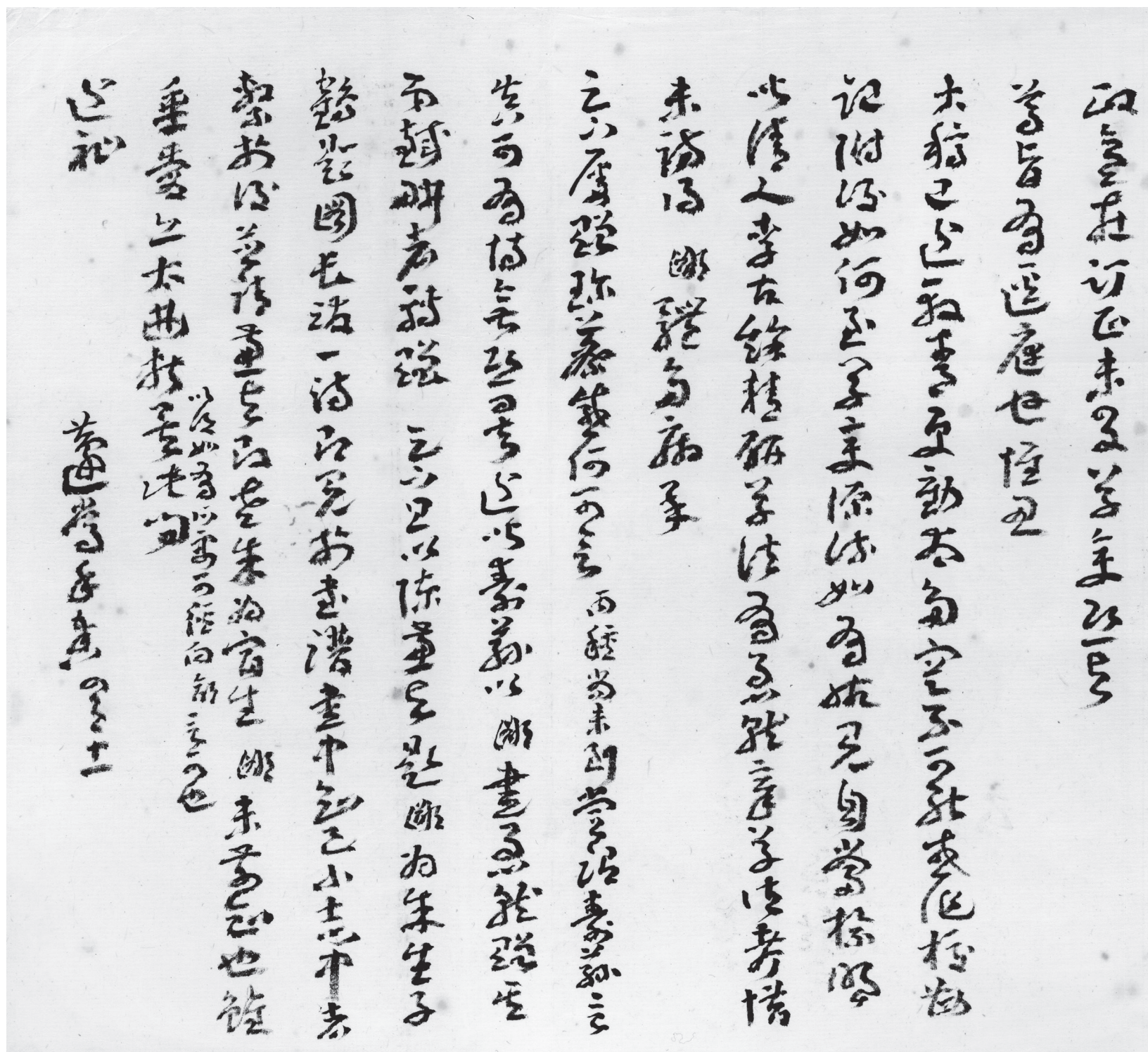
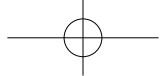
足下帖
(馮其庸宛
「十八帖」より)



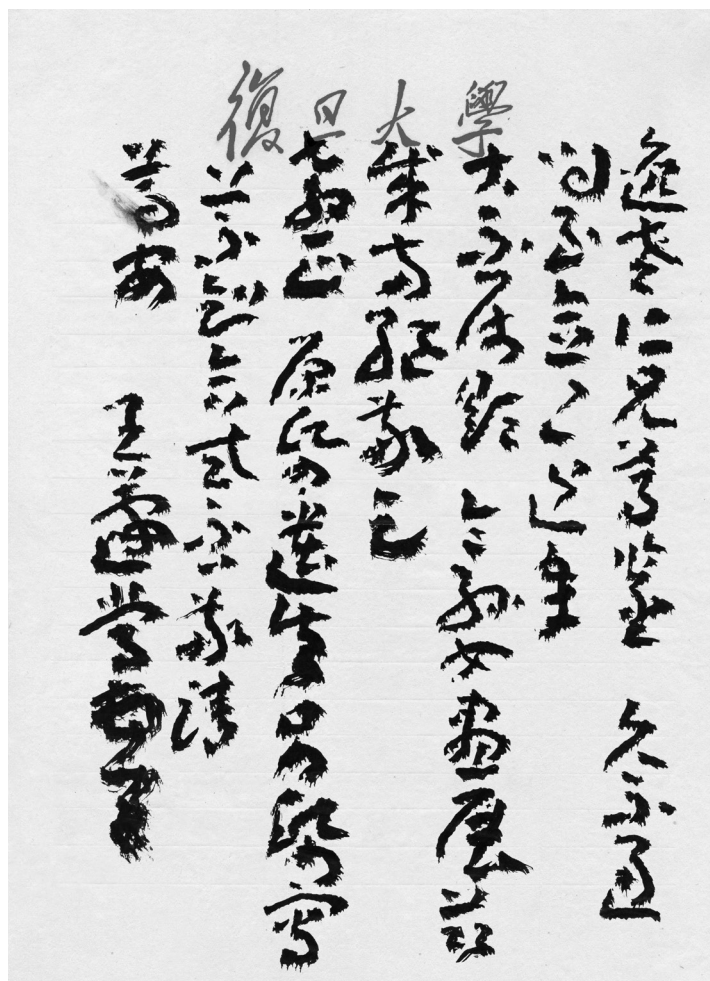
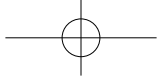
困憊見

年不禮也

大彙僅存六十餘卷因之書法刻以體其筆印
 證為難但為書之考者一字不釋教以字類解
 無種也而後之又字之無解與資料目錄無解
 多不相應這記極極極極極極極極極極極極
 出如子儀替寫細細極極極極極極極極極極
 陳公修名以記附與本者多生生生生生生生
 理本日初身身身身身身身身身身身身身身
 為之書一冠冕冕回心人字法多同源於此也明信
 人之少在止人尤宜信據茲者書之乃十卷即
 第一以書來志是

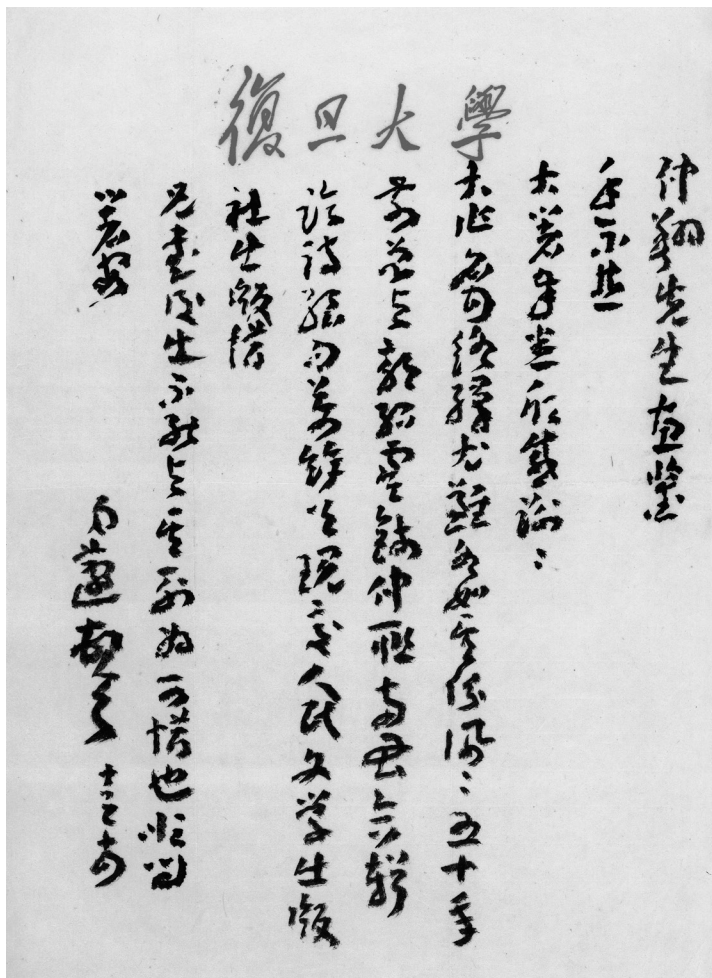


國權兄
手示祇悉
大彙僅看六十餘葉 因寒
舍遭劫 所藏無幾 印證
為難 但有書可考者 一
字不輕放過 常翻得數種
書而後定 又 字下數號
與資料目錄數號多不相應
憑記憶檢帖改正 竊意取
材必用善本 如月儀齋岡
翻刻極差 應用宋秘閣本
出師頌佚名所謂隋賢本者
多失真 応用墨池堂祖本
日本草草編有之 又應盡
量取急就章為全書冠冕
因後人草法多淵源於此也
明清人可少取 近人尤宜
慎擇 茲先寄上五十葉
即第一次寄來者呈
政 意在訂正 未及草變
恐與
尊旨有逕庭也 惟思
大稿已近殺青 更動太多
寔不可能 或作校勘記附
後如何 至草變源流 如
有所見 自當標明 聞清
人李古餘精研草法 有急
就章草法考 惜未訪得
鄙體多病 承……

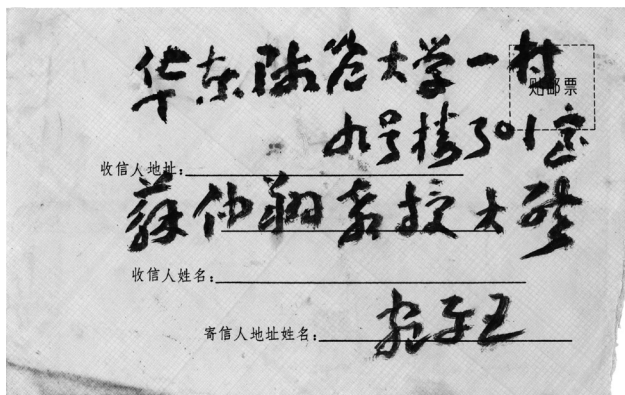


尊鑒帖
(鄭逸梅宛)

逸老仁兄尊鑒 久不通
問 至念至念 近奉
大示屬題 令孫女畫展 茲
成兩絕 敬乞
教正 原昏遺失 另昏寫
上 不知合式否 敬請
尊安 王蘧常頓首



大著帖
(蘇淵雷宛)

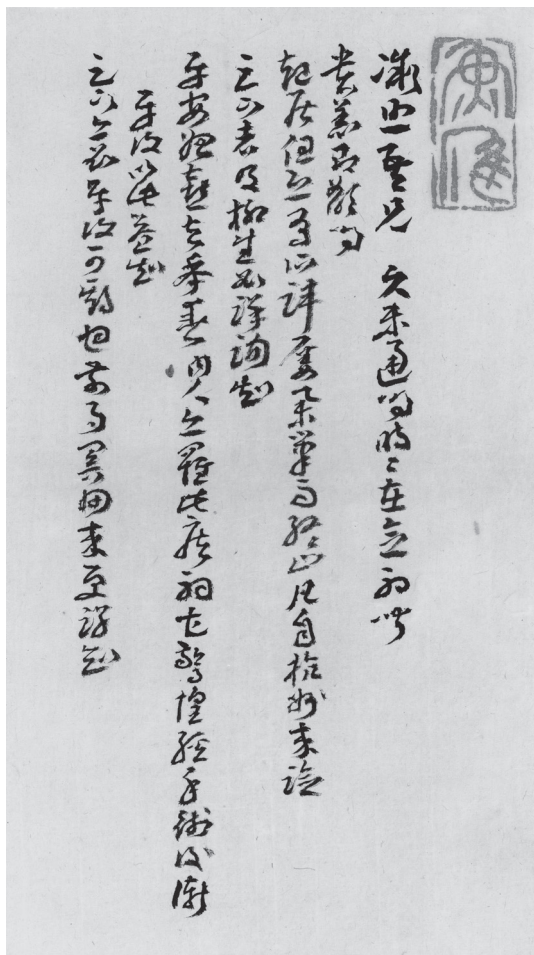


封筒 (大著帖)

仲翔先生惠鑒
手示並
大著奉悉 欣感 謝謝
大作名句絡繹 尤難各如其份 佩服 五十
年前 曾與郭紹虞錢仲聯兩君合輯論詩絕句
萬餘首 現交人民文學出版社出版 惜
兄書後出 不能與其列 為可惜也 順問著
安 弟蘧頓首 十月十四



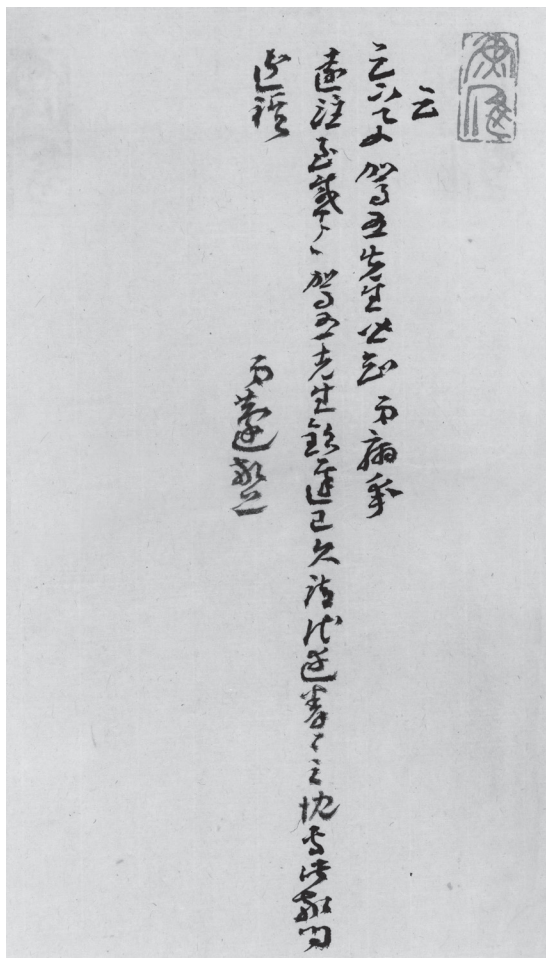
微照帖（陸維釗宛）



①

微照吾兄 久未通問 時時在念 初聞 貴恙 即欲問 起居 但恐有所諱 屢舉筆而終止 凡自杭州來諗足下者及柳生必詳詢……

云 足下與駕五先生皆知弟病 承 遠注 至感至感 駕五先生欽遲已久 請代達拳拳之忱 專此敬問 近祺 弟遽敬上

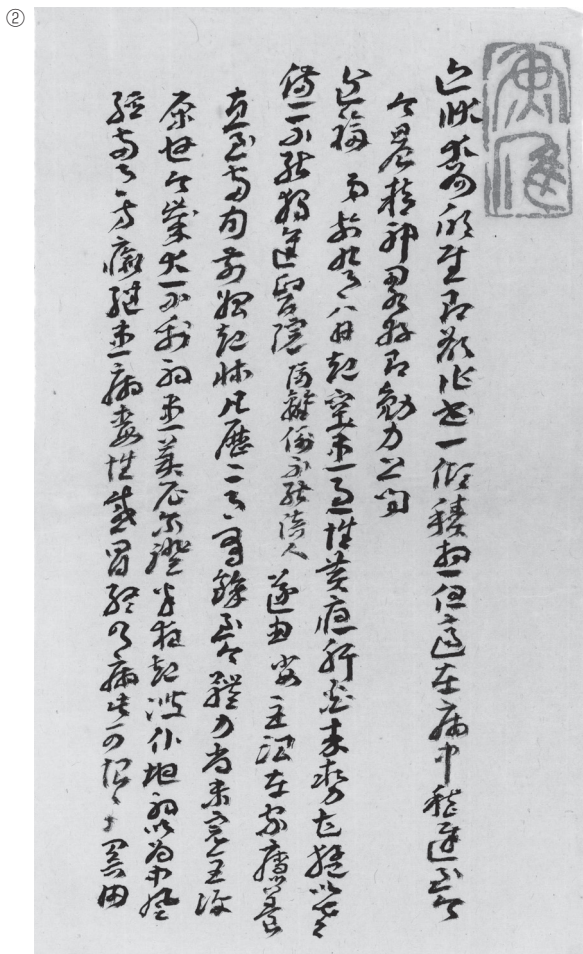


③

*①②③の順

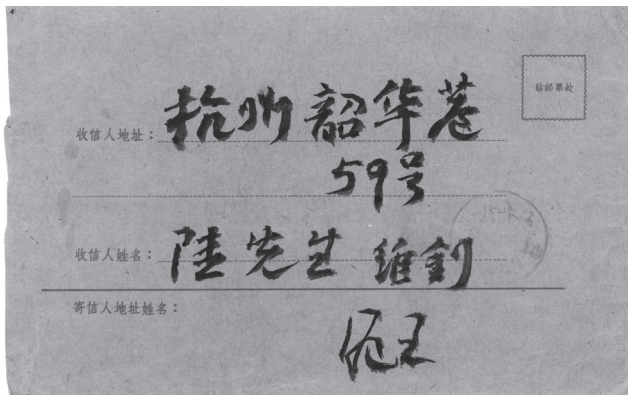
王蘧常の尺牘

章草の聖人



②

近状 大為欣慰 即欲作 書 一傾積想 但適在病 中 稽遲至今 今晨精神 畧好 即勉力上問 近福 弟於九月八日起 突患急性黃疸肝炎 來勢 甚猛 以老體不能獨進醫 院……



封筒（微照帖）

王蘧常の巨著・章草尺牘『蘧草法帖』

文／郭同慶

浩瀚なる尺牘集

去る六月二十六日（陰暦五月六日、端午の翌日）で端六、近史上最大規模の尺牘集『蘧草法帖』が上海で出版され、同日、記念の座談会が上海復旦大学で行われた。上海の主要メディアや書法専門誌はすべて、『蘧草法帖』の出版を大きく取り上げた。中国書法家協会機関誌の「中国書法報」（新聞）、「書法報」（新聞）及び「美術報」（新聞）が相当のページ数で特集を組んだのである。

コロナ禍で国際郵便物は大幅遅れたが、二週間後、私のところにも購入した『蘧草法帖』が無事に届いた。まず、『蘧草法帖』六巻一函の重さが一〇キロにも上ることに大変驚いた。蓋を開けると、布製の濃い藍色表紙に章草で、「蘧草法帖」（王蘧常書の集字）の金文字が打ち込まれ、穏やかに輝いていた。中身を捲ると、作品の写真や紙の質の文句のつけようのない素晴らしい。まさに一級品の出版物と言えるのではないか。この夏、宿題のように全巻を精読した。ここで『蘧草法帖』の出版背景、法帖概要、及び「蘧草」と章草の関係などを紹介しよう。

出版背景

今年、中国の国学者・章草大家である先師・王蘧常（一九〇〇—一九八九）の生誕百二十周年の年

であった。日本では二月に王蘧常先生顕彰会が、多くの日中書壇の関係者に協力をいただきながら、「蘧草傳新——日中書道展」を東京と前橋の両会場（本誌二六二号、二六四号を参照）で無事に開催し、マスク姿の交流写真が良い記念となった。

中国では、『蘧草法帖』（六巻）、『王蘧常文集』（十二巻）の出版、及び上海博物館での「先師・王蘧常先生遺墨展」の開催という三点セットで、これは一昨年、上海復旦大学で開催した王蘧常研究会常務理事会の決定事項だった。コロナの影響などで遺墨展は中止になったが、尺牘集『蘧草法帖』、著書『秦史』『諸子学派要証』、詩集『明兩廬詩集』『抗兵集』を含む『王蘧常文集』の出版は、予定通りに運んだ。

国学者・王蘧常先生は、生涯をかけて章草を研究し、章草を発展させたその書体「蘧草」は、人々を魅了した。特に中国の書壇では派閥を問わず、「蘧草」に対する評価が高い。沙孟海（一九〇〇—一九九二）、謝稚柳（一九一〇—一九九七）などの権威は、特に讃美した。書壇ではトップクラスになるほど「蘧草」のファンが多い。地元の上海はもちろん、北京方面でも例えば石開氏は、嘉徳などのオークション会場に足を運び、王蘧常先生の作品を密かに集めている。劉彦湖氏も独自に相当研究し、各種講演会で「蘧草」を論じている。

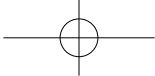
今日、「蘧草」のファンや、章草を勉強したい人が多くいるにもかかわらず、法帖が少なすぎる現状だ。かつて正規に出版された王蘧常先生の作品集は、



『蘧草法帖』の六巻一函

なかなか入手が難しい。そこで今は、海賊版も出回っているようだ。作品集は、『王蘧常章草選』（上海書画出版社、一九八三年）、『王蘧常書法集』（浙江人民出版社、一九八九年）、『海派代表書法家シリーズ』

●お問い合わせ／担当編集者・郭建中（247772440@qq.com）※日本語可



王蓮常』（上海書画出版社、二〇〇六年）の三種があり、既に絶版となっている。一方、ネットではかなりの高額で取引されている。このような状況下で、今回の『蓮草法帖』の出版は書壇にとって慶事であり、収録された文字数や情報の量も多く、作品集は読みやすい作りで、章草の研究者や愛好家にとっては、まさに願っていた最高の「法帖」である。

『蓮草法帖』の概要

『蓮草法帖』は、すべて王蓮常先生が毛筆、そして「文言文」を書いた尺牘である。即ち、一般的な対聯や条幅のような作品は掲載されていない。書体は年代を問わず、ほとんど草書（章草）で書かれたものである。編纂者は八十八人に宛てて送った、



先師・王蓮常（左）と語り合う郭同慶氏（右）

五百二十六帖の尺牘を吟味した上で、各帖の名称を決定した。

例えば、「舅父帖」「菊老帖」「寸残帖」から始まり、「晋陽帖」「易経帖」「書道帖」で終わる。一卷から四巻は各帖を掲載、五巻は釈文、六巻は『蓮草法帖』の目玉となる「十八帖」を拡大掲載した一巻である。

最も早いのは、一九二五年六月に、時の文史学者で北京大学教授の王国維（一八七七一—一九二七）に送った書簡である（現在は国家図書館蔵で、二〇一七年に中華書局が出版した『王国維往還書信集』に掲載）。最も遅いのは、一九八九年十月にアメリカで研修中の三男・興孫氏に書いた絶筆の家書である。絶筆とは、二十四日、昼に息の限界を案じたのだから、息子に身の近況を九項目にまとめ、書下ろしたものである。その晩に心臓病が再発し、病院に送られたが、翌二十五日の朝に息を引き取った。王国維から興孫氏までは約六十五年の歳月があり、その間に同僚・同郷、知人・友人、家人・門人などに送った五百二十六帖の尺牘集である。

編纂者

『蓮草法帖』の編集者は、王運天と郭建中である。王運天氏は私の兄弟子で、上海書画出版社の編集や上海博物館研究館学芸員を務め、学芸員の時代には東京国立博物館で研修を経験し、また、私と徐谷甫との「三人展」で来日もしている、知日派の学者肌の書家である。郭建中君は名門の復旦大学国学部を卒業した英才で、運天氏の弟子である。今回は助手を務めている。ちなみに数年前、建中君が王運天氏に弟子入りする際には、私が立ち会った。

運天氏は、先師・王蓮常先生の没後、約三十年間をかけて、先生の尺牘及びデータ資料を蒐集してきた。直近の二、三年間で全力を投入し、数え切れない程の地方出張を繰り返して、建中君とともに各地の博物館や記念館、及び収蔵家のところまで足を運び、毎回重い新型の機器を持ち込み、一枚、また一枚を、丁寧にスキャンし、最高の画像を得た。最終的に五百通をはるかに超えた尺牘を精査し、先師・王蓮常先生の遺族の同意を得た上で、五百二十六帖の総数を精選した。師弟の二人三脚で、章草の釈文、「文言文」の句点を打つ作業など、複雑な編纂作業を立派にこなしたのである。

「蓮草」とは

今回の尺牘集は、『蓮草法帖』という題名が付けられている。「蓮草」とは、王蓮常の独特な章草を指す。この呼称の由来は、謝稚柳氏である。謝氏は日本で馴染みの中国書協の元主席・啓功氏や遼寧省博物館館長を務めた楊仁愷氏らが参加した中国歴代



『蓮草法帖』を編纂した王運天氏（左）と郭建中氏（右）
（二〇一九年一月、上海にて／撮影：郭同慶）



「十八帖」を拡大掲載した一巻

された。そして一生涯をかけて探究し、特に六〇〜七〇年代の間に続々と出土した漢の木簡、帛書、石碑や陶片の文字を洗い出し、字形や崩し方の優れた文字をピックアップして、『武威漢簡選勝』と『居延漢簡摘奇』の二冊の本をまとめたほど研究に没頭した。その結晶として、魅力溢れる王蘧常流の章草「蘧草」を作り上げたのである。

ちなみに、草書は章草や今草、そして狂草に分けられる。于右任が提唱した運動は「標準草書」運動というが、個人名で命名された草書体は、この「蘧草」が初めてである。なお、楷書に限って、昔から欧陽詢の楷書は「欧体」、顔真卿の楷書は「顔体」という。

法帖のポイント

『蘧草法帖』は、六十五年の間に書かれた章草尺牘の書体の変化の過程がよく分かる。若い頃に研鑽を重ね、中年時代に認識や技法を昇華し、そして晩年に王道を創出——即ち発展の三段階を示す墨跡がよく揃っている。ここで、法帖のポイントを幾つか抜粋する。

その一——先輩の恩人・張元済（一八六七—一九五九）へ二十六年間に亘り送った「舅父帖」「菊老帖」などの三十九帖の尺牘である（第一巻に収録）。所々に張氏の回答文も目にとまる。張元済は、光緒進士、元・清王朝の官僚で、民国の時代に上海で出版業に転身、中国の中で最も歴史を持つ大手出版社・商務印書館の創立経営者だった。王蘧常先生の初期章草からは、もちろん若手文人の奮闘史や民国の混乱する社会状況も読み取れ、貴重な資料である。

その二——教え子の馮其庸（一九二四—二〇一七）

へ送った「五彩帖」「十八帖」等、六十四帖である（第三巻に収録）。其庸氏は四〇年代に無錫国学院で学び、王蘧常先生の指導を受けた中国の著名人で、中国芸術院院長、中国紅学（紅樓夢学）会会長などを歴任した、同門中で最も出世した人物である。学問はもちろん、学生時代から先生の書を集め始め、一番の受益者でもあった。王羲之の「十七帖」に対して、先生の最晩年に「十八帖」の制作を依頼し、高齢であり、また真夏だったが、先生は無理をして応じた。しかし、その粘り強い交渉力によって、先生の最高傑作が世に書き残されることになった。

「十八帖」とは、十八帖の尺牘で、最初の帖の冒頭に「十八日書悉」（十八日に手紙を受け取った）という文言から名付けられ、また過去に文通した尺牘を含む。一八帖の尺牘が数枚の画仙紙にまとめられたのは、先生が亡くなる一カ月前のことだった。「蘧草」の最高傑作であると同時に、文言文の文面も絶妙であるため、「十八帖」については拡大掲載した一巻を添えている。

その三——日本でも知られる香港の馬国権に應對した三十四通である（第四巻に収録）。馬氏は書道に関する著書を多く執筆し、章草字典を編纂した際に王蘧常先生に指導を仰ぎ、同字典の校正、監修、そして序文と、すべてに関して先生が協力した経緯がよく分かる。

その他、文筆家の鄭逸梅、版本学者の顧廷龍、書家の鄧散木、陸維釗、蘇淵雷、博物館館長の楊仁愷、弟子の陳從周、王運天、指導した大学院生の質疑に回答した文、息子・孫に送った家書、等々を通じて、王蘧常先生の教養、学問及び書道の造詣の深さがよく分かる。『蘧草法帖』の出版を心より慶賀したい。

王蘧常の尺牘

章草の聖人

書画鑑定五人組（國務院所管）の組長を務めた權威だ。先師・王蘧常先生の没年の翌年（一九九〇年）に、上海書協が王蘧常先生の遺墨展を開催した。会場で遺墨の全貌を観覧した謝氏が「王蘧常先生の書は章草と言うより、「蘧草」と言うべきだ。千年に唯一方だ」と関係者に述べたことから、「蘧草」という呼称が使われ始めたのである。

何故ならば、書道史上で数少ない書家が章草も書きはしたが、元の趙孟頫、明の宋克、祝允明などは、皇象「急就章」を写したり、真似たりといった章草しか残さなかった。先師・王蘧常先生は、違う。まず、章草を発展させるといふ思想や目標が、大先生・沈曾植（一八五〇—一九二二）より十九歳に時に託